

## 津村節子文学研究 [全文の要約]

著者	岩田 陽子
発行年	2017-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第621号
URL	<a href="http://doi.org/10.32286/00000362">http://doi.org/10.32286/00000362</a>

2017年3月期

関西大学審査学位論文

論文題名：津村節子文学研究（平成28年度）

文学研究科 総合人文学専攻 国文学専修 岩田陽子

#### 論文要約

津村節子は昭和40年上半期の第53回芥川賞受賞をきっかけに文壇に登場してから、今もなお旺盛な執筆活動が続いている作家である。平成2年には『流星雨』で女流文学賞を受賞し、平成10年には『智恵子飛ぶ』で芸術選奨文部大臣賞を受けた。さらに、平成23年には「異郷」で第37回川端康成文学賞を、「紅梅」で第59回菊池寛賞を受賞、平成28年には文化功労者に顕彰されるなど高く評価されている。

しかし、執筆歴が長く重要な位置づけにある作家であるにもかかわらず、津村節子を取り上げた研究はごく僅かである。主な先行研究をあげると、津村節子の代表作である「玩具」を取り上げた、川崎キヌ子の「津村節子『玩具』の春子」（『国文学 解釈と鑑賞』昭和51年9月）は、あらすじを追う中で、主人公春子を分析することに限局した作品論であり、武藤信夫の「津村節子の小説における女性空間」（『仁愛女子短期大学紀要』昭和57年3月）や高橋新太郎の「津村節子—形振りの平衡」（『国文学 解釈と鑑賞』昭和60年9月）は津村節子がそれまで執筆した作品の全体を批評するに留めている。個々の作品論も、文庫や自選作品集の解説や書評に限られているのである。

さらに、『日本海作家』の同人の坂本満津夫が著した『小説家・津村節子』（平成15年6月、おうふう）があるが、「気随気儘に作家の好きな作品を選び出し」、「あくまでも主観的に論述していく」という姿勢を示しており、詳細な調査に基づいた体系的なものではないといえる。

そこで、本論では、一次資料を利用した基礎調査を踏まえ、津村節子の各時代、各ジャンルの主要作を取り上げ、津村節子研究に新たな視点を提示した。本論は四章に分けられ、以下のような構成となる。

#### 序論

#### 第一章 津村節子の生い立ち

##### 第一節 少女時代

##### 第二節 女学生時代から学習院短期大学部時代

#### 第二章 作家としての出発

##### 第一節 「ジュニア小説」と虚栄心

##### 第二節 映画『明日への盛装』の女性表象

##### 第三節 津村節子が描く放浪の旅—「ネムロ」から「さい果て」まで—

##### 第四節 『さい果て』の長篇小説構想

#### 第三章 歴史の中の遊女を描く

##### 第一節 津村節子「海鳴」論—作品世界の生成と意義—

第二節 津村節子「海鳴」改訂の意義

第三節 津村節子が描く八丈島

第四章 戦争の記憶

第一節 津村節子「流星雨」論

第二節 津村節子「茜色の戦記」にみる「少女」の終焉

結論

付録 著書目録 略年譜

各章の概要を説明する。

第一章は、「津村節子の生い立ち」とし、津村節子の誕生から、作家として文壇に登場するまでを俯瞰、第一節は少女時代を、第二節は女学校時代から学習院短期大学部時代までを取り上げた。

津村節子は昭和 3 年、三人姉妹の次女として福井市に生まれた。津村は織物業が好況であった福井で、女性が産業を担う様子を肌で感じながら育った。昭和 12 年に母を亡くし、父親の教育方針で小学校 4 年生の時に東京へ転居した。第一節では、福井での暮らしや成績表などの基礎的資料、教師や友人たちの証言を交え、作家津村節子を培った少女時代を分析した。

第二節では、戦時下、敗戦直後の津村の動向を追った。東京府立第五高等女学校時代に父親をも亡くした津村は死を間近に感じるようになった。また、母の出生地入間川町に疎開してからは、敗戦によって生じた同年輩の夥しい娼婦たちを目の当たりにし衝撃を受けた。両親に続いて祖母を喪った津村は経済的な自立を考え、東京都目黒区のドレスメーカー女学院本科で学び洋裁店を始めたり、学習院短期大学部に入学したりと、敗戦直後の困難な時代に女性が生きる術について模索し続けた。多感な時代のこれらの経験は第二章から第四章で論じる作品にも色濃く影響を与えている。

第二章は、「作家としての出発」をテーマとし、学習院大学の文芸部委員長だった吉村昭と結婚後も子育てをしながら、生活を支えるために『女学生の友』『少女クラブ』といった児童雑誌へ執筆するとともに、『文学者』『亜』『Z』といった同人誌に作品を発表しながら、芥川賞や直木賞の候補に上り続け、昭和 40 年、37 歳で芥川賞を受賞するまでの時期を取り上げた。

第一節『『ジュニア小説』と虚栄心』では、次の内容を記した。

津村節子が若年者に向けて小説を描き発表した時期は、昭和 26 年から昭和 45 年であり、発表誌は『少女クラブ』『女学生の友』『ジュニア文芸』と多岐に及ぶ。この時期は、古い戦前からの「少女小説」が消え、「ジュニア小説」が台頭する時期にあたり、ジュニア小説で人気を博した津村節子を軽視することはできない。ジュニア小説で「結婚」が「最終目標」として設定されるという現状の中で、津村節子はジュニア小説とは「どう生きたらよいのかと問いつめる」ためのものと考え、「虚栄心」の克服を重要なテーマとしたとした。

また、大人の女性に向けて「虚栄心」を描いた処女出版作『華燭』と、「虚栄心」を描いたジュニア小説との比較を行うことで、初期の執筆姿勢を詳らかにした。

第二節では津村節子が『華燭』で描いた「虚栄心」が、中村登監督、山内久のシナリオで映画化されることで別の意味を持ち、受容されたことに触れた。

さらに、第三節では、放浪の旅を題材にした作品を分析し、第四節では芥川賞受賞作「玩具」を含む長編連作『さい果て』を取り上げた。

津村節子の長編小説『さい果て』は昭和47年3月に筑摩書房から発行された。長編『さい果て』の各章のうち、第三章の「さい果て」は新潮同人誌賞を、第四章の「玩具」は第53回芥川賞を受賞した作品であり、津村節子の文壇登場作となったものである。長編『さい果て』は津村節子を考える上では注目すべき作品であろう。

長編『さい果て』の全五章は独立した短編小説として発表されているが、津村節子は「短篇の連作長篇」、「初めから長篇の構想を抱き」とも言っている。作家として題材をどのように作品に昇華させるか模索していた時期の作品生成過程について明らかにした。

第三章では、「津村節子が描く遊女」をテーマに、第一節・第二節で佐渡を描いた『海鳴』を、第三節で八丈島を描いた『黒い潮』について考察した。第一節には、次の内容を記した。

「海鳴」は平野謙「佐渡金山水替人足の哀話 津村節子著『海鳴』（『週刊朝日』昭和40年12月）や尾崎秀樹「極限状況と愛の強さ」（『週刊読書人』昭和41年1月）など書評で取り上げられ、高く評価された。佐渡の歴史という特殊な社会背景を扱った「海鳴」は、時代背景と切り離し論じることにはできないはずだが、平野謙も「史実的にみて、その精確度を測定する能力は私にはない」としており、「海鳴」が舞台としている佐渡の歴史事象はこれまで綿密には分析されていなかった。

筆者は、津村節子が磯部欣三の『佐渡金山の底辺』（昭和36年、文芸懇話会）を参考にしたことを特定し、その記述と照らし合わせることで、津村節子が百年近くの間、佐渡に起こった痛ましい出来事を安永の数年に圧縮してまで、主人公に悲惨な宿命を与えようとしているということを解明した。また、これまで検討されていなかった収録経過の異同を分析し、「海鳴」が昭和40年に初めて収録される際、遊女が情死する場面に、死体を覆い尽くすほどの蟻の描写を追加し、佐渡金山と死体を結びつけ一層佐渡金山の残酷さを訴えようとしたであろうことを明らかにした。

第三節では、平成5年2月から『文藝』に連載された歴史小説「黒い潮」を取り上げた。「黒い潮」は15歳の時に附火の罪で、八丈島に流された遊女が描かれている。平成7年5月に河出書房新社より発行された『黒い潮』の「あとがき」で、津村節子は「『八丈島流人銘々傳』の中にある豊菊と花鳥」という人物に心惹かれたと述べている。「黒い潮」は江戸後期に存在し二人の遊女がモデルとなっているのである。

「黒い潮」は「海鳴」から約三十年の時を経て、再び、海で閉ざされた島の遊女を描いた作品である。両作はともに流刑地であった孤島が舞台となっており、それぞれの土地の

特異性が作品世界に色濃く表れている。佐渡の働き手が坑夫たち男性であったのに対し、八丈島では、年貢となる黄紬八丈絹の織手である女性が一家の生活を支えていた。「黒い潮」では男に身をまかせて生きる「吉原」の女と、男性より地位の高い「八丈島」の女が対照的に描かれている。津村節子は「黒い潮」で社会の犠牲となった女性を描くだけでなく、女性としての生き方をも問うた。

第四章では、「戦争の記憶」をテーマに、第一節では、津村節子が初めて自身の戦争体験と向き合い執筆した「流星雨」を分析した。戊辰戦争が描かれた「流星雨」は、敵であった薩摩藩士と結婚した会津藩士の娘内藤ユキの回想録『萬年青』が題材にされている。「流星雨」と『萬年青』を比較することで、「流星雨」では結婚を拒絶することを選択し、自立して生きようとする女性像を提示したということを明らかにした。

また、第二節では、津村節子の女学生時代を題材にした『茜色の戦記』を取り上げた。少女から大人の女性への過渡期に戦争を経験した津村節子は、初潮や月経、恋愛や結婚などを作品の中で印象的に生かすことで、女性にとっての戦争を捉え際立たせた。

津村節子は「女だてらにいのちをかける仕事、情熱を注げる仕事」として、それぞれの時代に生きた女性たちに向き合い描き続けるとともに、常に敗者や弱者の視点に立ち、その心の動きを繊細に捉えた作品を発表し続けた。社会の犠牲となる人々に焦点を当てることで、現代に生きる女性たちの生き方を問い続けている。